

## 編集室から

昨年に引き続き、今年も奥丹沢の洒水の滝に打たれてきました。全国各地の地域づくり・村おこし・街づくりのお手伝いをしながら、そもそも「人にとっての幸せとは何か」「地域振興とは如何なる状態を指すのか」といった根源的な問いに対する答えを探し続け、東西の近代哲学や宗教哲学に触れ、同時に我欲に対しても至らぬながら向き合っています。

本紙レギュラーで行政マンの溝口さんも袋井市で入滝されたと今月の記事。離れてはいますが、地域づくり・町興しをお手伝いする二人がともに滝に打たれている妙縁に驚きました。

さて前年同様、東京でミュートネットワークを主催されている河野智聖先生の御一行に混ぜて頂きました。今年は、さらにチベット密教と我が国の修験道を相修された川島金山先生もゲスト参加され、前日の研修と入滝の先達を務めていただく趣向。東京から現地までお二人の先生方と車での同行を許され、道中会話がたいへん盛り上がりました。

金山先生からは修験道の正式な入滝の作法を惜しみなくご教授いただきました。東京からの参加者には事前研修があったそうですが、遠方から参加の私は前日からの速習。

梅雨の豪雨のせいでしょうか。前年よりも遥かに水量が増していました。中には弾き飛ばされて中々入れない方もありました。いざ瀧を前にすると、俄か覚えの知識は真っ白に。それでも、金山先生の暖かいお導きで、なんとか行を終えることができました。（写真右が金山先生）撮影してもらったビデオを見ると10分程も打たれていたようです。

水は強く打つのですが、何故か瀧は優しく感じたのが不思議です。皆様に深く感謝申し上げます。（は）



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/08  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)



2010/08  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 景 月



能登・薬師の里にて  
by hama

(前号に続く)話を戻したい。小学生の時の将来の夢「吉本興業に入って人を笑わせたい」それは、自分の父親が地元の祭りで総司会をしていた時、場を和ませる為に自ら「ばあちゃん」に仮装して舞台上に立っていた。祭りに来て頂いたお客さんの為に、自分には何が出来るか?と考えた結果が、仮装する事になったそうだった。舞台上で会場の雰囲気や和ませたり、笑いをとる父の姿が、小学生の自分にとって物凄く心を動かされたのだと思う。まあ、単純にお笑い「よしもとのイメージ」だった。その後、中学では文化祭で一つ上の先輩とコンビを組み漫才をした。高校では文化祭でコントを。とにかくステージ上に立って自分を表現することが快感だったし、みんなの笑顔が見たい一心だった。

高校卒業後の進路を決める時、表現の可能性に魅力を感じ、俳優の専門学校にきめた。そこでは沢山の事を学んだ。単に演じるだけでなく、企画・制作・脚本・演出・舞台美術・照明・音響・映像制作・カメラワークなどなど。数えきれない程の情報や経験を2年間に詰め込んで一気に学んだ。それは、一つの舞台や作品を作り上げるプロセスを、座学のみならず常に実践で経験するというカリキュラムで、かなり過酷だった。その反面、貴重な経験をさせて頂けた事に心から感謝している。そして、卒業後を考えているときに、俳優やタレントになりたいなら田舎から発信していくのが近道だよ。という岸本氏の下で修業をする事になり、地元に戻ってきた。

結局のところ「笑い」というものから「俳優」を目指した自分の夢は、まだ実現していない。「地域づくり」に関わっているこの六年は、常に疑問だった。なぜこのような仕事に関わっているのだろうか?と。いつか、また「俳優」になる為に都会へ出たいと、葛藤があった。しかし、地域づくりにかかわっていく中で、様々な人との出会いが少しずつ自分を見つめ直すきっかけとなっていった。この地域に生きるおじちゃん、おばちゃんは果たして十年後存在するのだろうか?誰がどのように、この人の知恵や経験を受け継いでいくのだろうか?受け継いでいくのは、誰でもない。そのことに気付いた自分自身である。

自分の人生はまだ始まったばかり。いろんな人とのかわりの中で自分を見直すことは、自分のおかれた立場や環境を理解すると同時に、出会いによって、活かされていることへの感謝の念が生まれてくる。昨年四月に結婚し、今年三月三十一日に家族が増えた。小さな命を守るという大きな責任は、日々の自分を支える「生きる力」であることを心から感じる。そしてまた、人との出会いの中で励まされ、自分の生まれた地域の良さに気付けたことで、小学生のころに抱いた夢は、地域の人たちを笑顔にする「ことへと具体的に」なってきた。

自分が活かされている事へ日々感謝し、大地に大きな根を張って、大きな花を咲かせたい。



【プロフィール】  
(すぎまつ たかあき)一九八四年一月二九日生まれ。二〇〇四年大阪ビジュアルアーツ専門学校卒業後、(有)プリズムに就職。二〇〇九年十月(有)ひまわり亭に就職。現在に至る。

## 漬のつばやき 『自治力』

参議院選挙を目前にした金曜日。何故か早めに仕事を終えて、能登の自宅に帰っていた。その夜、一時間に百十ミリを越える局地豪雨に見舞われた。

その後全国各地で豪雨災害が続いた。心からお見舞いを申し上げたい。

豪雨の激しさを伝えるのに、「バケツをひっくり返したような」と表現するが、時間百ミリ超では「湯船をひっくり返したような」と表現が合うかも知れない。家の前の道も川の如くとなり、全ての窓を閉め只呆然と室内から眺めているしか無い。

雨は、ほぼ一時間程で止んだ。川が増水して被害が出るのは、雨よりやや遅れる。ホツとするのも束の間、村の役員が巡回してきて道路や田畑、家屋に被災があり、明朝総出での復旧作業を告げた。

翌日は、抜けるような快晴。幸い災害は我が集落周辺に限定的。集落内を流れる河川の上流で土砂崩れがあったようで、最高水位の周辺は土砂が堆積していてハッキリそれと判った。朝八時から始まった作業は一部を除き、ほぼ全戸から一人ずつが出勤した。他に親戚・縁者の応援が被災した家々に入った。

橋に引っかけた流木やゴミや、道路に堆積した土砂を取り除く。何処からか重機を借り、免許を持つ者が操作をする。集落内の主要道路は一部陥没。早速

業者も駆けつけて復旧工事が併行する。そのための主な道路を先行して作業し、後に全ての路地と被災した家屋の床下、納屋・蔵の片付けの手伝いと続く。道路の土砂は、中途半端に乾くと固く締まり、スコップが立たない。一輪車との人海戦術で大まかに除いた後、洗い流すしかなかった。

道路など共用部分に目途が立つと、皆は被災家屋に入りだす。高齢や独居、空家で作業が進んでいない家屋も、多勢の手により見る見るうちに片付いてゆく。町会長に携帯電話で怒鳴られて市の担当者がやって来たのは、概ね作業が終わった頃だった。全てが終わりに解散となったのは夕方十六時を回っていた。

能登半島地震の時もそうだった。震源地に近いある集落が孤立。行政からの救助を期待せず、隣接漁港から漁船を依頼して女性と子ども、病人を海路で非難させ、七十を越えた町会長の元、健康な男どもだけが残って、亀裂が入った斜面にブルーシートを掛け、道路を自力で復旧させ、その後も自警したと聞く。

国民主権という。自治という。我が集落も高齢化が著しい。高齢者が半数を超えると限界集落というらしい。本当の自治力とは、緊急時に行政に頼らず自力で復旧できる能力も含まれているのではなからうか。限界集落とは、高齢化率ではなく、むしろ自分の事しか考えられず地域に非協力的な住民の割合に因るのではないかと災害を経験するたびに思うのである。

今回は、秋田県日本海沿岸の由利本荘市内を走る由利高原鉄道(羽後本荘～矢島)について私が学生を引率した巡検から案内する。

この7月、私が本学観光学科で担当する「交通地理」の授業において、学生の現地研修で由利高原鉄道(鳥海山ろく線)の乗車と第3セクター会社へのヒアリング調査を行った。受講学生は3年生3名であったが、この鉄道に乗車するのは全員はじめてであった。授業では地方をめぐる鉄道、バスなどの公共交通の問題をいくつかの事例を入れて講義したが、なかなか伝わらないもどかしさを感じていた。残念ながら、学生の多数は自分で計画して旅行するという経験があまりないことと、地域の問題への関心が高くないということが実情である。そのためにも、現地を見る、知ることが大事であると日頃から意識しているがなかなか実現できないでいた。

秋田駅から羽後本荘駅までJR羽越本線に乗車し、羽後本荘駅で由利高原鉄道の車両(1両)に乗り換える。日曜日の10時50分発の列車で車内は15名、ざっとみたところ観光客と地元客の比率は2:1であろうか。観光客らしき人のうち、半分は中高年男性の鉄道ファン風の方である。この日は最近、多くの第3セクター鉄道等で導入している客室アテンダントが乗車していた。由利高原鉄道では昨年、秋田県の雇用対策関係の補助金を使用し客室アテンダントを臨時職員として3名を採用しているとのことである。客室アテンダントは、乗客に手作りの小物の記念品を渡し、子どもには金平糖を手渡していた。途中駅からは3世代の家族連れが乗車し、「何十年ぶりに乗車したよ」などと話している。運転士も途中、ゆりの花が見えるところ、子吉川の沿岸あたりでは車窓ガイドと減速運転で乗客を楽しませてくれた。こうして羽後本荘と矢島間の23kmを40分で走行し、矢島駅に到着した。

到着後、由利高原鉄道の方に概要等の説明を受けた。1985年に旧国鉄矢島線を引き継ぎ開業後5年は黒字経営であった。その後、赤字に転じ秋田県と由利本荘市が50%ずつ補填しているという。現在の利用客の70%は高校生であり、少子化で毎年減少している。これは私の勝手な試算であるが、羽後本荘～矢島間(往復運賃1,160円)で高校生1人の通学定期客が減るとすると定期券代で年間18万7,920円、この減少分を埋めるためには観光客162人が往復で1回、乗車しなければならない計算になる。

由利高原鉄道としても観光客増加のために、ビール列車、こいのぼり列車、七夕列車などのイベント列車を運行しているほか、山形県の山形鉄道(フラワー長井線)と連携し、相互送客に取り組んでいる。

参加した学生は、第3セクター鉄道の厳しい現状を改めて実感するとともに、この鉄道を持続させていかなければということ意識してくれたように思う。改めて、学生にとって早い時期に多くの実体験を積ませる必要を感じたところである。



## 速報 「二重課税訴訟」国の敗訴確定

### 生命保険金の受取時の課税について

去る7月6日、最高裁において、被保険者が死亡した後に受取人が年金形式で受け取る保険金について、相続税でその年金受給権を課税対象としたうえで、年金を受け取るたびに、所得税を課するのは二重課税であるとして、国に課税の取消しを求めた訴訟の上告審判決がありました。

#### 経緯

平成18年11月 長崎地裁・・・二重課税(原告勝訴)

平成19年10月 福岡高裁・・・一審破棄(原告敗訴)

#### 今回の最高裁判決

二審の高裁判決を破棄、所得税の課税処分取消しを命じ、原告側逆転勝訴が確定。

#### 判決のポイント

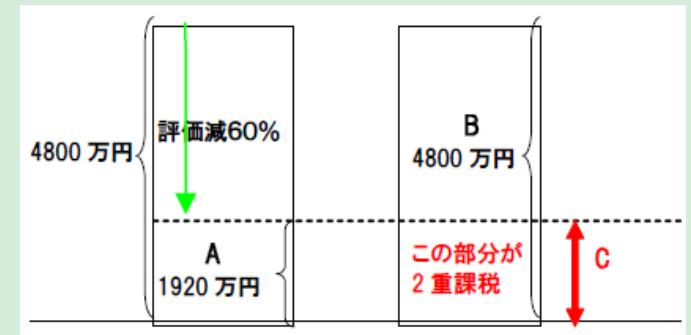
そもそも「二重課税」の意味は、保険金の年金受け取りについては相続時に「年金受給権」として相続税の課税対象さらに各年の年金額については所得税の課税対象という、この同じ課税年金に対し、二重に課税がなされているとするのが「二重課税訴訟」です。具体的に今回の最高裁判決では次のような考えを展開しています。

#### 前提になる条件

契約者及び被保険者：夫、年金受取人：妻

年金月額：20万円(年金受取総額4,800万円)

相続税評価額：1,920万円(旧相続税法24条適用後の金額)



相続時の課税対象額は将来年金として受取る総額(4,800万円)の60%評価1,920万円である。

#### 今回の判決は・・・

この相続時に課税を受けた1,920万円も含めて各年の年金を雑所得として課税するのは二重課税である。

従って年金として課税すべきは1,920万円を超える2,880万円(4,800万円 - 1,920万円)に留めるべき。

これが今回の判決における「二重課税」の概念です。この判決を受け、国税庁は具体的な還付請求に係る「既存の法令通達の改正・整備」「方法論」等検討中と思われ、現時点で、具体的なことは何も発表されていません。分かり次第、皆様にお知らせしたいと思います。

## 『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

静岡県 溝口 久

(前号から続く) 5時起床。2月14日の夜明けは振鈴とともに始まった。身の回りを整えると、座禅「暁天坐」。ここで心を整える。

次は朝のおつとめ「朝課」。どの宗教でも朝夕におつとめがあるが、神・仏に、鳴り物を入れ念仏を唱えて祈るということである。袈裟に身を包んだ住職、修行僧が行うおつとめに同席した。

いよいよ、朝食になる。「小食(しょうじき)」と呼び、おかゆとひじき、漬物にごま塩がついていた。このおかゆには十の利点ありと教わる。色艶、気力、長寿、安楽、言葉清く爽やか、宿便残らず、風邪を引かない、消化よく栄養となる、喉の渇かず、便通もよし。とのこと。何より腹八分は良し。昨日の夕食「薬石」同様の作法に基づき食が進む。



食後、作務があり風呂掃除が当てられた。作務終了まで、健康そのものを心底感じる朝の一連の行動であった。

そしていよいよ、三日坊さんの旅のメインイベントとも言える「滝行」の場、油山寺に向う。千古の昔、考謙天皇が眼病の時に油山寺の薬師如来に祈願をかけられ、滝の水を加持祈祷し、その霊水で洗眼され、眼病全快された所以の滝である。その名も「るりの滝」、名に相応しい優しい一筋の瀧である。

到着後、住職の案内による境内拝観をし、写経に入る。紙に息がかからぬように和紙のマスクをかけ、薄く書かれたお経を慎重になぞり書きしていく。結構集中できるものである。



「滝行」の時間が刻一刻と迫ってきた。二月の寒中時だけに体調に自信のない方は無理してこの荒行をしないようにと言われた。二日前ほど前の喉の痛みは不思議と収まっており、ここまで来てやらぬわけにはいかない。結局14人の参加者のうち、滝行をしなかったのは一人だけで、私より年上にもかかわらず女性は皆、瀧に打たれる事になった。

「るり滝」の傍らには滝行のために更衣スペースが設けられ、そこで白装束になった。滝の流れ落ちる池にまずはつま先からそろりそろりと足を入れる。冷たい!足首上10センチ程の池に入っていると冷たさは痛さに変わってくる。まずは般若心経を皆で唱えた後、一人ずつ滝に打たれる。松平健に似た住職が仁王立ちして不動明王真言「ノーマッサマンダ バザラダンカン」と唱える。滝に打たれる者も同じように唱える。目をかっと開き気合を入れて滝に臨んだ。住職がいいというまで打たれる。その人の反応を見ての判断だ。小生は威勢よくというより

やせ我慢していたせいとか人より長めの時間滝に打たれることになった。あごを引き後頭部下に滝を受ける。受けた滝の水が首筋から流れ落ちていく。白装束はぴったりと体にくっつき、霊水が全身を包み込む。冷たさ、痛さの次は意識が朦朧となり仏に近づいていくと思っていたが、そこまでやると素人の我々には危険なので一分間までぐらいで終わっていく。でも実に長い一分であった。朝は氷が張ったであろう池の中で滝に打たれる順番を待つ人たちを横目に濡れた白装束から作務衣にすぐに着替えた。体はホカホカ、内部から熱を発していることがわかる。



滝業のあとには、地元にある「わしょく亭高尾」のこだわりの薬膳弁当が待っていた。鯉、鯛味噌、鮪と昆布、落のとう、菜の花、筍、、メニューには食材が書かれ、それぞれの効能が書かれていた。そこに書かれていた「菜の花 ガン予防」が気になった。そうか、菜の花かぁ

油山寺を後に、この旅の最後「法多山」に向う。遠州三山の一つで最も規模が大きく、参拝者も相当に多い。725年聖武天皇勅命により、行基上人によって創建。高野山真言宗に属し厄除け観音として知られる。名物の「厄除け団子」はお勧め。

とにかく広い境内を拝観、その後普段は入ることができない本坊にて「お茶の歴史と心」の講和があった。仏教とともに伝来したお茶の歴史、そしてお茶の持つ八つの福 眼福、鼻福、耳福、唇福、口福、到福、幸福、至福のお話を伺った。そしてお茶の入れ方。袋井のお茶は深蒸茶なので、70~80度のお湯に40秒ぐらいで出すとのこと。これをあえて50~60度、90秒ぐらいで出すのも一興だ。遠方に出かけるときに静岡のお茶をただ差上げるのではなく、煎茶を出すコンパクトな茶器を持参し、たっぶりめの茶葉に一煎目は50度50ccのお湯で2分ぐらいかけて出す。そして一滴残らず器に取り、それを人数分の湯呑に分ける。二煎目は80度でいつもの湯量で出す。一煎目の甘みのある深い味、二煎目はしぶい味の異なる味が楽しめて、普段飲んでいるお茶の味との違いに驚かれる。

お茶の後は「心の書」一文字として、半紙に今回の旅を一文字で墨書きし、それを掲げて一人ずつ皆の前で、今回の旅のことを語るというのだ。なかなかうまいことをする。

小生は「喜」とした。実に結構な旅をさていただいた。「お坊さんの日常生活を体験し、新しい自分を発見する」というコピーに相応しい内容だった。新しい自分を発見したつもりが、すぐに鮮度が落ちるので、また「三日坊さん」を旅しなければと思う。次回は2泊3日コースに参加したいものだ。是非、貴方もご一緒にどうぞ。

毎日実施している旅行商品ではなく、すぐは9月11,12日及び11月20~22日にある。(詳しくは袋井市観光協会のHPから) おしまい

